

平成 20 年度スタンフォード大学研修報告

札幌医科大学病院 小倉 圭史

1. 参加した目的とその成果

この度、日本放射線技術学会平成 20 年度海外研修派遣にて 7 月 20 日から 7 月 27 日までの 1 週間、スタンフォード大学短期研修に参加する機会を得た。今年で 3 回目を迎え、非常に洗練されたスケジュールが組まれており、かなり充実した研修であった。

この研修参加にあたり、最新の心血管画像診断の現状および研究、Molecular Imaging、さらに 3D Lab の運用について学ぶことを目的とした。心血管 CT では日本のほうが活気あるように思われたが、ピルビン酸塩 (13C) を利用した心臓 MRI、また Molecular Imaging の可能性ではかなり刺激を受けた。3D Lab の講義、見学では、3D 画像処理テクニック、画像解析、徹底したマニュアル、トレーニングシステムなど非常に興味深く印象に残った。

2. 日本と米国の放射線技師制度の違いをどのように感じたか

日本の技師免許はすべてのモダリティーが扱えるのに対して、米国では X 線撮影が行える技師免許がスタンダードにあり、その後、CT や MRI、AG、US に携わるための資格が必要になる。それぞれ技師格が異なり、右に行くほどランクアップとなるみたいである。日本では一人の技師が一般撮影から CT、MRI などを扱うことが可能だが、米国ではモダリティー毎に完全に独立している。この放射線技師制度は一長一短があり、どちらが優れているとは言えないが、日本の技師制度は決して劣っていないことや日本の技師のレベルの高さを実感した。

3. 今回の研修で得たことを今後どのように生かしたいか

今回の研修では、毎日が刺激的な講義の連続で、また多くのアメリカ文化にも触れることができた感がある。このような環境に触れられたことは自分を見つめなおす機会となった。今回の研修で得たものを糧に日々楽しく信念を持って仕事と研究を進めていきたいと思う。

4. 終わりに

今回このような機会を与えていただいた日本放射線技術学会の関係者の方々、研修で大変お世話になったスタンフォード大学の皆様、細やかな配慮をしていただいたリーダーの内田先生、研修の間、親身に私たちのお世話をしていただいた GEYMS の皆様、そして、今回の研修に参加することを快く承諾していただいた札幌医科大学附属病院放射線部の皆様に感謝する。

Stanford Medicine Imaging Center にて
写真左:小倉(本人)、右:山下さん(鳥取大学)

